

10. 学生時代からのキャリアプランニング

中島 美紗央 (キャリアコンサルティング技能士)

照屋 朋子 (国際NGO創設者)

新井 浩子 (文学学術院非常勤講師・進行)

1. はじめに

これまでの授業で検討してきたように「多様性」と「参画」は個人や組織が能力を発揮し、持続的な社会発展を実現しようとする際のキーワードであり、社会システムの変革とともに、新しい個人の生き方の創造が現代的課題となっている。そこで本日はOGである中島美紗央さん、照屋朋子さんを社会人講師としてお招きした。

お二人は2007年法学卒の同期だが、対照的なキャリアヒストリーを持っている。中島さんは卒業後にリクルートに就職し社員としてキャリアを積んだ後に独立、現在はフリーのキャリアコンサルタントとして働く傍ら子育てをしている。照屋さんは、大学院生時代に立ち上げた国際NGOの代表としてモンゴルの孤児たちの生活・自立支援で成果をあげた。二人の経験を通して女性活躍とダイバーシティの可能性、個人の可能性を発揮するキャリアプランニングについて考えたい。

(新井)

2. ダイバーシティ世界を生きるための人生設計—中島美紗央さん

(1) キャリアプランニングとは

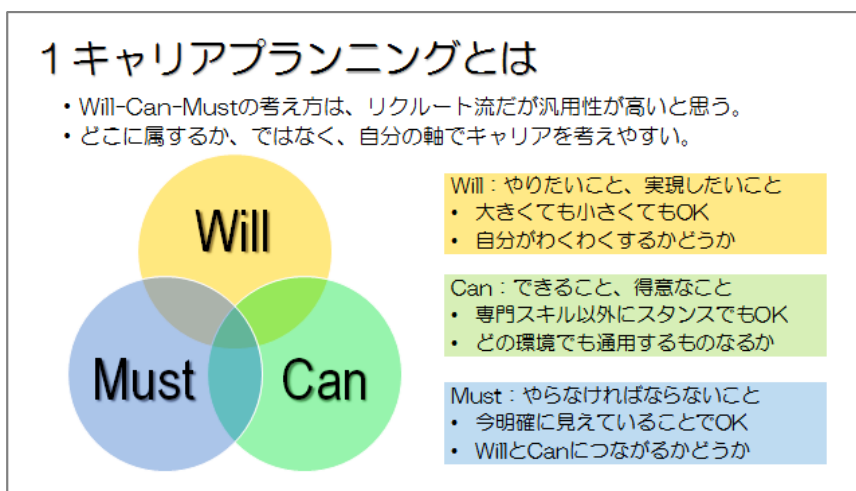
キャリアには「山登り型」と「筏下り型」の2種類があることをご存じだろうか。「山登り型」は目標や夢を定めてから具体的にやることを決定する人で起業家やアーティストなどに多い。「筏下り型」は与えられた環境の中でやりたいことを決定する人で、大企業の生え抜き社長などに多い。あなたはどちらのタイプだろうか？

Will：自分がやりたいこと・実現したいこと、Can：自分ができること・得意なこと、Must：やらねばならないことの3点から考えてみよう。

Willが最初に浮かぶのは「山登り型」の人である。ゴールが先に浮かんで「それを実現するには…」と思考する。「筏下り型」の人

はMustから考える。与えられた環境の中で「自分にできること、したいことは…」と思考する。

実は照屋さんは典型的な山登り型で、私は筏下り型の人間である。どちらのタイプにも良い面、悪い面がある。今日は私たちそれぞれの経験をお話しするので、皆さんが自分のキャリアを考える際の参考にしてもらえたらと思う。



(2) 私のキャリアヒストリー

私の「筏下り型キャリア」の事例を紹介しよう。私は2004年に法学部に入学したが1年生の時点で法律には向いていないと気付いた。お酒が飲めないのでサークルでも居場所がなかった。勉強もサークルも合わないとなると大学生活はつまらない。それなら「働いてみよう！」と思いITベンチャーで長期インターンをしたところ、日経新聞に取材された。予想もしなかった成果だったが、やはり社会人のように働くのは大変だった。それで「お酒なしで活動できるサークルがないなら作ろう！」と思い、2年生の時にキャリアデザインに関するサークルを設立した。当時早稲田では女性のキャリアを考えるような機会がなかったので、関心を持ってくれそうな先生の所に行って授業の提案をしたりイベントを開催したりした。この時話を聞いてくれた一人が矢口先生で、女性のキャリアをテーマにした授業も作られた。しかしサークル活動を熱心にするバイトの時間がない。働かずにお金を稼ぐ方法として当時流行していた投資に興味をもち、3年生の時にダイヤモンド社から株に関する本を出版した。4年生になると、彼氏とこのまま付き合っていて大丈夫なのか不安になり、彼の人となりを見極めようと一緒に東南アジアを半年バックパッカーした。その彼と8年後に結婚し今は子どもがいる。

社会人になってからも同様である。リクルート入社後に私が配属されたのはSUUMOという不動産業務の営業だった。不動産に全く興味がなかったので当初は辛かったが「まずは3年、苦手から始めたら後が楽！」と気持ちを切り替えて働いたら、社内の新人賞やMVPを複数回受賞するという成果がついてきた。4~5年目には希望して全社人事部へ異動したが、最初は結果が出せずに自信をなくした。自分にもできることを探したところリーダー職になり、全社人事部MVPを受賞することができた。ふり返ると私はいつもやらねばならないことが先にあり、その中で自分ができることをする過程で、自分がやりたいことができてきた。入社7年目には当時最年少でマネージャーに昇進し、経営幹部候補研修にも選抜された。

30歳を機にフリーランス人事として独立したが妊娠で休止することになった。仕事なくなるかもという焦燥感が生じたが、逆にネットショップの運営や在宅ワークで1日2h業務委託など自由に働くことができていく。結果だけを話すと私はモチベーションの高い、運に恵まれた人だと思われるかもしれないが、実際にはそうではなく、必ずしも良くない環境でどうするかを考えたところ結果がついてきた。

企業などで働く20代のキャリアの8割は筏下り型と言われる。筏下り型なら、与えられた環境でまず結果を出すことに集中すると良い。変えられることを見つけると「想定外」に悩まされにくくなるし、結果を出すと次に自分の進みたい方向に行きやすくなる。一方で、自分の人生の「期限」と「優先順位」を決めておくことも重要だ。目の前のことが楽しくなってうっかり流され続けることを避けられる。また選択肢を増やしておき「選択する」ことも、リスクを軽減するために重要だ。

(3) これからの世界での働き方

現在でも企業での女性の働き方は育休復帰か退職か、フルタイムか時短勤務かなど二者択一になりがちだ。しかし多様な人事制度が導入されており変化は確実だ。さらにこれからの時代は企業で働く以外の選択肢も増えてくるだろう。

新しい働き方の名前やコンセプトを上げてみよう。皆さんはどれくらい知っているだろうか。「リモートワーク」「プロボノ」「クラウドソーシング」「ダブルワーク」「ノマドワーカー」「コワーキング」「グロースハック」「インディペンデント・コントラクター」、そして「ダイバーシティ」「ワー

クライフバランス」など、今この瞬間にも新しい働き方が生まれている。私の現在の働き方にも明確な名前はないようだ。

複数の収入源を持ち、ライフステージに合わせて柔軟に働きたいと思う人達は多いのではないか。これからは、自分で働きかたを「創れる」時代になっていく。そのためにも、学生時代に、①自分のキャリアプランの方向を仮決めしておく、②一つは「やりきった」ということをする、③「期限」と「優先順位」を決める癖をつける、そして、④自分が大事にしたいものを明確にしておく、ことをすすめたい。

3. モンゴルの孤児たちを支援してー照屋朋子さん

(1) はじめに

私は大学卒業後、弁護士を目指して上智大学の法科大学院に進学した。しかし入学1か月後に、学部生時代から関係のあったモンゴルの孤児院がつぶれてしまうという話を聞いて、NGOを創設した。それから約10年間、NGO代表としてモンゴルの孤児たちの支援をしてきたが、今年2016年3月に設立時の目標を達成したのでNGOを解散し、現在は各国の貧困の状況を知るために世界一周をしている。今日は、仕事に限らずこれまで私がどのように生きてきたのか、そしてこれからどのように生きていきたいと思っているのかを話したい。

(2) マンホールチルドレンとの出会い

中学生時代は遊んでばかりで勉強もせず、高校を中退すると言って親と喧嘩をするような子どもだった。転機になったのは高校1年生の春で、友達に誘われてボランティアクラブが行っていたマンホールチルドレンの写真展を見たことだった。

マンホールチルドレンというのは、路上生活をするモンゴルの孤児たちである。モンゴルの冬は気温が-30~40度まで下がるので、孤児たちは暖を求めて地下のマンホールで寝泊まりする。マンホールのなかは温水が通っていて暖かいのだが、ネズミやゴキブリ、寄生虫なども集まっており、寝ている子どもの耳や唇を噛んで感染症が起きたり、熱湯が通る土管が破損して子どもたちが亡くなることもあり、生きていくには大変危険な環境だ。



マンホールチルドレンの男の子

写真展でマンホールで暮らす子どもたちの写真を初めて見て、とてもショックを受けた。学校に行けるのに行きもせず、親がいるのに反抗してばかりいる自分は一体何をやっているんだろうと思い、「何かしたい」と強く思った。そこでボランティアクラブに入部し、高校3年間は活動に励んだ。自分が一生懸命やるのが人の役に立つというのがすごく楽しくてこうした活動を一生の仕事にしたいと思い、早稲田大学法学部国際関係コースに入学した。

第二の転機は、大学2年生の時に「自分のプロジェクトを経営する」という授業を受講し「自分の一生をかけてやるプロジェクト」を半年かけて考えたことだ。そこで「一点突破」という考え方を知った。大きな壁は全身全霊で押してもびくともしないが一点に集中して力を加えれば穴をあけ

ることができ、それは変革のきっかけになりうる。当時私は、世界中のストリートチルドレンをハッピーにするというプロジェクトを考えていたが、まずは一国、一地域、一人の子どもから始めることが重要ではないかとアドバイスされた。そこで夏休みに原点であるモンゴルに行き、孤児院「太陽の子ども達」にてガンバイル君と出会った。

ガンバイル君は純粹で優しい子どもで、私たちは仲良くなった。生い立ちを聞いたところ、彼は物心ついた時からマンホールで育ち、自分の本当の誕生日も名前もわからないということだった。帰国後、孤児院の所長が彼が学校で書いた作文を送ってくれた。夏の思い出というタイトルで、私と出会ったこと、母の愛とはこういうことかと思ったこと、そして「芸術の才能を磨いて日本に行きお姉さんと会いたい。神様、僕にチャンスをくれますか」という文章で終わっており、読み終わって涙が止まらなかった。

再度、孤児院を訪れた時に彼が知的障害をもっており小学校を退学になったことを知った。モンゴルでは18歳になると孤児院を出て自立しなければならないが、彼が将来どのように生きていくのかとても心配になり、何があっても一生関わり続けるお姉さんでいたいと思い、私の一点突破の一点はガンバイル君に決まったのである。

(3) NGO ユイマールの設立と「太陽の子ども達」への支援

卒業後は、法整備支援家という立場で国際貢献することを目指して法科大学院に進学した。ところが入学1か月後に孤児院の所長から、資金がなくなり孤児院がつぶれるから助けてくれというメールが届いた。両親にお金を借り孤児院の存続を支援しようとしたが、「人のことを助ける前に自分が自立すべきだ」と言われた。就職して送金を試みたが、孤児院を存続するだけのお金を送れるはずもない。そこでメンバーを募り2007年に「NGO ユイマール」を立ち上げた。

孤児院の存続危機に加えて、モンゴルでは孤児院卒業後98%がマンホールに戻るという問題があった。当初は、進学や手に職をつけることで自立を支援しようと大学進学のための奨学金を立ち上げたが、進学や就職をしても中退や離職するケースが多いことを知った。子どもたちは自己否定観



「太陽の子ども達」の子どもたちと（前2列右から3人目、照屋さん）

が強く、すぐに諦めてしまう傾向がある。マンホールで生活する子どもたちは夢や目標は持たない。生きていくために「諦める」ことが身についているのだ。

そこで子どもたちが自分たちの力で何かをできたという成功体験を積むことを目的に、孤児院併設の音楽学校にてプロの音楽家の指導で子どもたちが音楽を習うプロジェクトを始めた。さらに年に一度、来日コンサートを開催した。一生懸命練習した自分たちの演奏が観客から認められること、そして日本の人たちとの交流が子どもたちに自信と変化を与えた。

日本でホームステイをした15歳の男子のエピソードを紹介したい。ステイ先のお母さんが「風邪をひくよ」と入浴後の彼の頭をふいてあげた時、彼は突然固まって泣き出してしまった。お母さんもびっくりして泣く彼を抱きしめたという。その後、彼はお父さんお母さんに一緒に寝て欲しいとお願いしてその晩は3人で寝たそうだ。帰国後に彼は、将来はプロの馬頭琴の演奏家になりたいと言い、最難関の国立音楽大学の馬頭琴学部への進学を目指して努力し、高校時代には国立楽団メンバーに選ばれ大学へも合格した。

彼の原動力は、楽器の練習を頑張ったから日本に行くことができ、自分にはかなわないと思っていた家族までできたという経験だろう。努力によって自分の世界が広がるということを彼は実感知として持てたのだ。こういう奇跡が子どもたちみんなに起こり、NGO設立時に目標とした自立を達成することができた。現在は結婚し親になった子どもたちもいる。

こうした経験を通して私は人間の持つ可能性はすごいものだと思うようになった。マンホールに住んでいた子どもたちの変化は世界中の子どもたちに共通することであり、次は世界中の子どもたちに自分の可能性を発揮するチャンスを提供したいと思うようになった。

(4) 今後に向けて

昨年2015年に、「世界の若手リーダー50人」に選出されダボス会議に参加した。ここで世界のリーダーたちと会ったことが私の第三の転機になった。これまで私はNGOという非営利組織で活動してきたが、企業やビジネスの手法や資源を生かした社会貢献活動の可能性を知った。また、現在の子どものだけでなく、私の孫の代までも幸せに暮らせる世界をつくることに貢献したいと思うようになった。そこで2016年にNGOをいったん解散し、世界を見て回ることにした。

今後どのように生きていきたいかという、孤児達の自立支援のみならず人類の未来に貢献したいと思っている。今世界では国家の枠組みが崩壊しつつあり、近い将来にはロボットや人工知能などの技術革新による失業が予想されるなど様々な問題がある。限られた資源を奪い合うのではなく、皆が幸せに共存できる社会をつくっていききたいというのが今の私の夢だ。そして生き方としては、親切で愛のある楽しい人生を歩みたい。たった一度の限られた人生だからこそ、周囲の人たちと手を取り合い、挑戦してみたい。挑戦して後悔することはないのではないかと考えている。